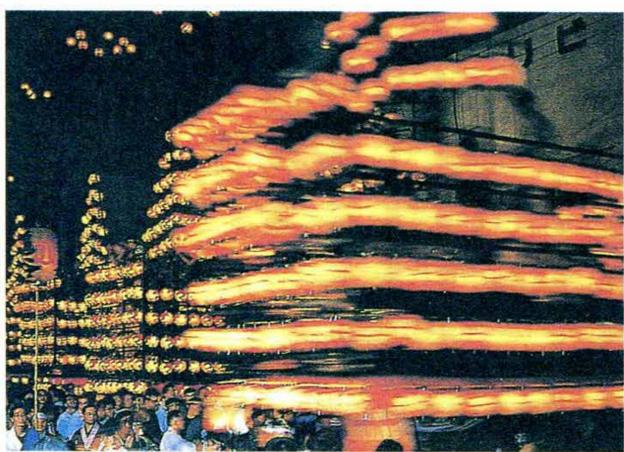


# 太鼓の響きに体を踊らせ、囃子の音色に心を震わす。

幾千という提灯が秋の夜を彩る…二本松の代表的な風物詩

## 提灯祭りの由来

今から約360年前(寛永20年<1643年>)丹羽光重公が二本松城主として入府、「よい政治を行うためには、領民にまず敬神の意を高揚させること」と考え現在の栗ヶ柵に二本松神社をまつり領民なら誰でも自由に参拝できるようにしたのが、提灯祭りの始まりといわれています。



## 現在の祭り

現在は10月4・5・6日の3日間が祭礼日。4日は宵祭り、午後5時に7町内の太鼓台が市内の中心部に集合、二本松神社の御神火で一斉に提灯に火がとります。1台に300余の提灯をつけ7台の太鼓台が情緒豊かな祭り囃子の調べに合わせて市内を練り歩くさまは壮観です。

## 祭りのみどころ

**10月4日** (雨天中止の場合、同時5日・6日に順延となります。)

毎年10月4・5・6日に行われている提灯祭りのいちばんの見どころは、4日の宵祭り。この日は各町内から鈴なりの提灯をつけた7台の太鼓台が練り出し、二本松神社のかがり火を紅提灯に移す。太鼓台は威勢のいい若連のかけ声とお囃子を奏しながら、市内を勇壮に練り歩く。夜空を赤々と焦がしながら移動する幾千もの提灯は見物客までも熱くする。しかも、夜間の運行で全ての町内が揃うのはこの日だけ。

**10月5日**

5日は、例大祭の最も重要な行事である「神輿渡御」が行われる日。7町合同引き廻しも2日目を迎え、午前8時半頃駅前を出発し、午後3時頃まで行われる。その後、神社では神輿の宮入が行われ、夜は各町内に戻った太鼓台が再び提灯を点けて、町内を練り歩く。

**10月6日**

6日は、祭りの最終日。昼は、それぞれの町内を引き廻し、夜は4町と3町のふたつに分かれ、合同引き廻しが行われる。ひととおり廻った後も、名残り惜しさゆえ、なかなかお囃子は止まず、夜が更けるまで満天の空に鳴り響く。

## 観る前に知っておきたい 太鼓台のあれこれ

### ●提灯の数

各町で異なりますが、1台につき約300個。提灯には町名が入っていて、どこの町か一目でわかる。上り坂など太鼓台の揺れが激しいと、提灯が燃えてしまうことも。これらはすべて市内の提灯屋で作られています。

### ●高張提灯

長い竹の棒に大きな字の紋や町名が入った提灯で、太鼓台の前後にひとつずつ付けて運行します。高張提灯の間は字の境界になっていて、原則として他町は進入禁止です。

### ●運行係

各町により役職名は多少異なりますが、ハンドル操作ができない引き廻しの指令塔的存在で、運行の全責任を担う。太鼓台の前でいつも後ろ向きに歩きながら、拍子木の音とポーズで全若連の動きを統率し、出発・停止・進行方向の指示を出す。

### ●屋根係

屋根の上に登り、主に「すぎなり」の操作をする。電線などの監視のほか、高所のローソク取り替えも重要な仕事。時に屋根から身を乗りだし、威勢の良い掛け声で祭りを盛り上げる。

### ●すぎなり

各町で若干違うものの、高さは地上11~11.5mぐらいで、可動式になっている。竹を割って作られた先端部にも提灯が下げられる。

### ●ローソク

ローソクは、タバコ程度の長さになったときに取り替えられます。一晩のうちに使われる数は太鼓台1台当たり1,500本を超えます。使用済みのローソクは、外に捨てずに提灯の中に入れてそのまま。ローソクを取り替える若連の手際も見どころのひとつ。

### ●囃子方

太鼓台に乗り込む囃子方は、大太鼓1名、小太鼓3名、笛3~5名、鉦1名など。大太鼓と笛は若連が、小太鼓と鉦は、最前列に座る小若が担当する。お囃子は、町ごとに様々な特徴があり、7町に残るすべての曲が、県の重要無形民俗文化財に指定されています。

### ●車輪(ワッパ)

木製の車輪はハンドル操作ができず、4輪のうち1点を軸にして曲がるので、方向転換は大変。接地部分にはハガネを使用。車輪の下には小さな車輪を挟んだり、力まかせに回したりと、曲がり方もまちまちです。

